

新潟大学研究推進機構超域学術院  
研究プロジェクト研究成果（中間）報告書

(1) 研究プロジェクト名

チンギス・ハンの実像と現代的意義の研究

(2) 研究プロジェクト構成員・職・氏名

リーダー 白石 典之（人文社会・教育科学系・教授）  
メンバー 広川 佐保（人文社会・教育科学系・准教授）  
奈良間千之（自然科学系・准教授）  
柴田 幹夫（国際センター・准教授）

学外研究者 小畑 弘己（熊本大学文学部・教授）

村上 恭通（愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター・教授）

(3) 研究成果の概要

①プロジェクトにおいて目標としたもの

**研究の着眼点：**世界史の大きな研究課題の一つに、13世紀におけるモンゴル帝国（西暦1206-1388年）の成立がある。いかにしてユーラシアの東西にまたがる強大国家が短期間に誕生したのか。その解明のためには始祖チンギス・ハン（カンとも。1162?-1227年）について知らなければならない。しかしながら、彼の事績には不明な点が多く。彼自身の強大化の背景も、モンゴル帝国の成立についても、いまだ明らかになっていない。

未解明の原因の一つに信頼できる当該期の文字資料が少ないことが指摘できる。そこで本研究では、文字資料に目配りしつつも、物質資料に基づく考古学的方法でこの問題に取り組む。同時に、モンゴル高原は人類生活圏の中でも有数の自然環境の厳しい地域である。内陸にあり、極度の乾燥と寒冷、加えて激しい気温の年較差・日較差にも見舞われている。そのような環境の克服無くして強大化は有り得ない。いかにして極限的環境から成長したのか。それを知るため、当該期の自然環境を復元に取り組む。その上で、考古学、古環境学、文献史学が協業して、文理融合的・総合的にモンゴル帝国興隆のメカニズム解明を目指すのが本研究である。

モンゴル遊牧民の動静は、世界史を動かした原動力の一つと言っても過言ではない。その理由には、この地に誕生した諸王権が、中国歴代王朝と和戦両面で関わりを持ち、その興亡に大きな影響を与えたこと、洋の東西を結ぶルートに中央に位置し、相互交流に大きな役割を与えたことがあげられる。なかでもモンゴル帝国の成立は、当時のユーラシア全体に大きな影響を与えた。強大な軍事力で瞬く間に巨大な版図を築いたその国には、残虐・殺戮といった負のイメージがつきまとうが、それは一面だけからの理解である。既存の宗教を認め、民族融和にも努めるなど、プラスの面も多々ある。ユーラシアを一体化したことは、のちの大航海時代のプロローグ、またはグローバル化の先駆けとしても評価されている。

そのようなモンゴル帝国史研究は、歴史分野にとどまらず、現代的意義をもつといえる。なぜなら今日の世界の諸問題の解決に、重要な示唆を与えてくれるからだ。たとえば、中央アジアでは、モンゴル帝国とその後裔国家による民族の不当な区分けが、紛争の火種になっている場合がしばしば見られる。グローバル化の弊害と民族対立が頻発する現代社会において、モンゴル帝国興亡の正しい理解は、人類の未来への舵取りを誤らないために、意味あることだと考える。

**従来の研究の問題点：**チンギス・ハンには史上名高いが事績のほとんどは詳らかではない。その原因は伝説的な内容の史料が多く、ペルシャや中国など外部で書かれたバイアスのかかったものが利用されてきたという、文字資料中心の研究の限界にあるといえる。その結果、「カリスマ」「軍略家」「凶悪な統治」といった実証的でない解釈が流布する結果となった。実際とは異なる時代像が形成され、当該分野の研究が停滞している原因となっている。

**本研究での方向性：**モンゴル帝国成立期をめぐる大きな問題として、資源量が乏しい草原で、しかも乾燥・寒冷の地域で、いかにして強大な王権が成立できたか、ということが根底にある。これが解明されない限り、この国家の本質は理解できないであろうし、またそれが解明されれば同じようにモンゴル高原に興隆した遊牧諸王朝についての研究も進展するであろう。

その時代は中世温暖期が終り、環境悪化が始まったとされる。先行研究では、その悪化の中で遊牧民族は糧を得るために周辺地域への侵攻を開始したのだという。ただ、悪化といっても、近年欧米でベストセラーになったブライアン・フェイガン著『千年前の人類を襲った大温暖化』（邦訳は2008年、河出書房新社刊）では急激な高温化が原因といい、一方で、IPCC発表や、中国の文献史料は寒冷化が背景にあった（たとえば、竺可楨1972「中国近五千年來氣候變遷的初步研究」『考古学報』72-1）というように、正反対な解釈がなされているのが研究の現状である。

私たちがこのような環境変動がモンゴル民族の拡大の背景にあると考え、興味を持っている。ただし、それは環境（気候）が良くなれば王朝が勃興し、悪くなれば衰亡するという表層的理解ではない。単なる環境決定論ではなく、人間と自然系との相互作用からこの問題を捉えるというところに視点を置いている。それを実行するために考古学をベースにする。それは文字資料による先行研究の限界を克服するためである。くわえて自然地理学と気候学によって古環境復元をおこない、文献史学の蓄積も援用しつつ、総合的に研究するという方向性を考えている。そこには文理融合という学問の領域を超えたメンバーによる体制で行うといった従来の北アジア考古学あるいは東洋史にはなかった独創的な点も持ち合わせている。

**本視点に対する外部評価：**モンゴル帝国史の考古学的研究は、本応募課題の代表者である白石が世界に先駆けて始めた（白石典之2002『モンゴル帝国史の考古学的研究』同成社）。白石は考古資料による実証的アプローチでこの問題を20数年間追求してきた。この視座はモンゴル帝国史研究に大きな転換点をもたらし、白石は2003年にモンゴル国大統領から「最優秀若手モンゴル学研究者」として表彰されるなど、当事国で評価されている。また白石は大学共同利用機関法人・総合地球環境学研究所の客員教授（2006年度）を務め、現在も共同研究員である。モンゴル環境問題の専門家として、また文理融合プロジェクトのリーダーとしても実績を有している。

**予想される結果・目指すもの：**モンゴル高原は大部分が乾燥・寒冷なステップ気候で、温暖地域に比べ生態収容力は低い。そこでの強大な権力の勃興には、限られた資源をフルに活用する生活の知恵と技術が存在していたと想定する。その実態や、知恵と技術が相関して興隆していくメカニズムを明らかにしたい。反面、そのようなやり方は、生態系にかなりの負荷をかけたとみる。やがてモンゴル高原周辺の自然環境は悪化していったと想定している。たとえば、鉄製生産のための森林伐採、鉱害、また、増加した人口をまかなうための、大規模農業と過度な家畜の放牧が連動し、草原を破壊したことなどがあげられる。これが衰亡のプロローグになったのであろう。本研究では、そのような自然と人間の関わり合いからモンゴル帝国興亡を解明することを一義的目的とする。まず詳細な乾湿・寒暖変動を押さえ、そのうえで文字資料を加味しつつ、総合的にモンゴル帝国興隆のプロセス、メカニズムを提示していきたい。

**研究の現代的意義：**モンゴル高原では近年の急激な経済発展の反動で、大気汚染、水質汚濁、草地破壊など自然環境が急速に進んでいる。私たちはモンゴル帝国興隆期にも同様の問題が起こっていたと想定している。そうであるならば、過去の人々はその問題とどうに向き合い、そしてどのような結末を迎えたのか。本研究での成果は、現代人の将来を考える上で示唆的なものとなる。現在声高に叫ばれている地球環境問題の解決にも貢献できればと考えている。

ほかにも本研究の現代的意義はある。チンギス・ハンはモンゴル人にとって神のような存在である。その言葉や行動規範は今なおモンゴルの人々の生活の隅々に息づいている。モンゴルとモンゴル人を理解しようとするならば、チンギス・ハンについて知らなければならないのだ。日本にとってモンゴルは切っても切れない関係にある。中露にはさまれた地政学的要衝という政治的思惑からだけでなく、大相撲などのように文化的にも結びつきが強くなっている。とくに近年では、モンゴルの豊富な地下資源をベースにした経済関係が強化されつつある。結びつきが強まるのは結構だが、モンゴルの習慣や人々の考えも理解せずに、土足で踏み込むような行動をして、日本人が問題を起こすケースが増えている。日本とモンゴルがよりよい持続的パートナーとなるために、日本人はモンゴル人が崇拝するチンギスについて学ぶべきである。本研究成果がその一助となれば幸いである。

**積極的な成果の公開：**最終年次には国際シンポジウムを企画している。歴史研究としてだけでなく、地球環境保全・人類のよりよい未来構築という、前向きで、一般参加できるテーマにしたいと考えている。同時に親しみやすいパンフレット・ホームページを作成し、専門家だけでなく、一

般の人々にも成果を知らせる努力をし、プレスリリースなども積極的に行う。また、年次報告、最終報告などは英文で作成し、ひろく世界に発信し、学問的に世界最高水準のものが提供できるように心がける。さらに、一般啓蒙書を通して広く人々に本研究の意義を紹介し、同時に、歴史から現代社会および人類の未来の有り様を考え直す機会になればと考えている。

## ②目標に到達するために選択した方法・手段

本計画ではモンゴル帝国の始祖チンギス・ハンの実像を明らかにすることを第一義とした。チンギスの生涯には謎が多い。史料が少ないだけでなく、伝説的で信憑性に乏しい。そこで考古学と関連諸分野の学際・文理融合型アプローチで実証的研究を追求した。設定した課題には、まず強大化の背景の解明があった。生態収容力の低い草原から如何にして強大な政権が生まれたかを、モンゴル高原をフィールドに、食糧獲得、武器生産、古環境復元などから研究した。つぎに現代的意義の解明にも取り組んだ。現代モンゴル人にとってチンギスは信仰対象であり、彼の遺訓研究は哲学の一分野にもなっている。モンゴル理解のために、モンゴル人のチンギスに対する考えの把握を、新史料の収集と意識調査により試みた。

まず、**強大化の背景の解明**がある。生態収容力の低い草原から如何にして強大な政権が生まれたか。モンゴル高原をフィールドに、食糧獲得、武器生産、古環境復元など文理両面から多角的に追求した。また、帝国中枢にいた貴族たちの墓の調査が鍵になると考え、リモートセンシングやGISを駆使した探査を実施してそれらを発見し、物証から実証的に当時のようすを明らかにした。

つぎに、**現代的意義**である。現代モンゴル人（モンゴル国・内モンゴル在住）にとってチンギスは信仰対象であり、彼の遺訓研究は哲学の一分野にもなっている。本計画の円滑な推進だけでなく、モンゴル理解のためにも、モンゴル人のチンギスに対する考えの把握は必須となろう。そこで本計画では、内外モンゴル各地に現存するチンギス聖地の歴史と祭祀の実態を明らかにすることを目指した。その一環として、世論調査でモンゴル人のチンギスに対する意識を精査した。チンギスの理解を通してモンゴル人の深層に迫ることを試みた。

本計画では、過去と現在をターゲットとした2つの研究が、互いの成果をフィードバックしつつ、車の両輪のように関連しながらチンギス・ハンの実像に迫る。単なる過去の人物研究にとどまらず、未来を見据えたモンゴル研究をおこなった。その結果は東北アジア研究の一助となるとともに、地政学的要地で、地下資源も豊かで、日本との関係は日々強化されつつあるモンゴルの理解に寄与するはずである。本計画が日モ両国の関係発展に果たす役割は学術分野はもちろん、多方面に及ぶと期待できる。

研究にあたっては、白石に交付されている日本学術振興会科学研究費補助金をベースとし、その研究組織ともタイアップしておこなった。また、当該科研が連携しているモンゴル科学アカデミー、中国人民大学、ドイツ・ボン大学、ロシア極東工科大学などとも緊密に情報交換をしながら研究を遂行した。

## ③これまでの研究で得られた成果

### A 成果の概要

1) 衛星画像を用いたリモートセンシング・地理情報システム (GIS) の活用で、当該期の遺跡を新発見できた。チンギス・ハンの本拠地であるアウラガ遺跡の西北約 25km にあるタワン・ハイラースト遺跡である。そこを発掘したところモンゴル帝国時代の貴族墓群だと明らかになった。これまで 22 基を発掘し、武器や馬具などの遺物と、人骨試料を得た。人骨試料は AMS 法による放射性炭素年代測定をおこない、細かい墓の年代を導き出すことに寄与した。それと同時に炭素・窒素安定同位体比分析も実施し、当時の食性も明らかにすることに成功した。これらは裏づけデータを整えた上で学術誌に発表する予定である。また、遺物のうち銀製品やガラス製品は、電子線マイクロアナライザー分析に供し、興味深いデータを得ることに成功した。これもまた現在、論文化することに力を注いでいる最中である。まさに文理融合型研究の成果といえよう。

2) チンギス・ハン崇拜の普及浸透に旧日本軍の影響が強かったことが新史料により明らかにできた。とくに近代内モンゴルにスポットを当てることにより、政治利用のなかで揺れるチンギス・ハ

ンとモンゴルの人々の姿を明らかにした。当時の満洲国で発行された新聞資料を丹念に読み込むことにより、時間的推移の中で、日本軍の関与が増すにつれ、チンギス崇拜が次第に日本軍国主義のスキームに位置づけられていったようすが、具体的に復元できた意義は大きい。チンギス・ハンと日本軍。日本の大陸進出時の研究に新たな視点を与えるものとなる。

3)新潟大学留学生の内モンゴル、外モンゴル出身者をベースに市民アンケートを実施した。チンギス・ハンに関しての想いや、活用、外国人が研究することに対する感想などを、内・外それぞれに尋ねた。その結果、チンギス・ハンに死してなお、人々の心を支配し続けていることがわかった。モンゴル人は彼をアイデンティティの表象とし、敬い崇拝してきた。フェルトのゲルがコンクリートのアパートになり、馬が自動車に変わっても「チンギスの子孫」であることに誇りをもつ。そんな純粋な気持ちがアンケートから明らかにできた。ただ、内モンゴルと外モンゴルでモンゴル人の間でチンギス・ハンに対する意識・評価が異なることもあぶり出された。より深く信仰のようにチンギスを敬う外モンゴルの人々と、観光や経済発展のためならばチンギスの利用もやむを得ずと考える内モンゴルの人々の相違が明確にできた。その背景や未来への展望を、さらに掘り下げて検討すべきだと考えている。

4)以上の成果は学術論文のほか、白石典之編『チンギス・カンとその時代』（勉誠出版、平成 27 年 9 月刊）を刊行して一部を公開した。専門性と学術的レベルを担保しつつ、一般の人々にも受け入れてもらえるよう、平易な文章と校正になるように編集したものである。

## イ 特筆すべき成果

### 1) アウラガ遺跡の調査

アウラガ遺跡はモンゴル国ヘンティ県デリゲルハーン郡にある。この遺跡の調査は 2001 年から継続して行われている。アウラガ遺跡はチンギス・ハンの本拠地「大オールド」の跡と考えられている。そこは東西 1200m、南北 500m の範囲に多くの建物遺構が認められる。

本プロジェクトでは 2013、2014 年に遺跡西南部の第 2 地区 (Loc.2) で発掘調査を行った。第 2 地区には 14~15 基の建物敷地と思われる方形区画が、西南から東北方向に 400m にわたって連続して遺存している。それらの区画の機能を解明すべく、比較的残りの良い西南から 10 番目の区画 (Loc.2-10) を発掘した。この第 2 地点第 10 区画は北緯 47 度 05 分 42.5 秒、東経 109 度 09 分 41.4 秒に位置する。区画は地表面で観察すると 40m×15m ほどの長方形で、四周は外周より 0.5m 高く、中心部は四周より 0.4~1m 低くなっていた。

まず、区画の規模と、四周の高まりの構造を明らかにするため、主軸方向とそれに直交するそれぞれ 2 本、計 4 本の試掘溝 (1~4 号トレンチ) を設けて発掘を開始した。その結果、方形区画の四周は版築工法により造られた土壁で囲まれていることがわかった。その囲壁の長辺は 37.9m、短辺は 17.8m であり、長辺の方向 (主軸) は N38°W であった。土壁の厚さは 0.7~0.8m、当時の高さは不明である。

つぎに、囲壁西北奥のほぼ中央で 1 棟の建物跡 (1 号建物) を発掘した。建物基壇はない。14 か所の柱跡から平面構造が明らかになった。主軸は N38°W で全体規模は間口 7.9m×奥行 9.5m であった。間口 3 間×奥行 3 間で、奥行き 2 間分は本体部、南 1 間通りは廂を付けて吹放し廊としていた。本体部は出入口の南の入側柱筋の中央間の他は、厚さ 0.7~0.8m の版築工法による土壁で周囲を塞いでいた。その範囲は間口 7.9m×奥行 8.2m であった。建物の奥壁は区画囲壁の奥壁と共用であった。

本体内部にはベッド状の施設があった。左右奥の 3 面の壁内側に沿って幅 1m、高さ 0.5m で、白い粘土と日干しレンガによって作られていた。ベッド状施設内部に煙道は確認できなかったのも、暖房施設ではなく、腰かけあるいは寝台だったと考えられる。また、建物右奥の床面に径約 1.5m の焼土と木炭の集中箇所が見つかった。地床炉と考えている。

上屋の高さと構造は不明であるが、梁材や柳の枝を編んだ材片が混入した粘土の屋根材が、床全体を覆うように見つかった。このことから土葺きの、おそらく平屋根で、建物全体のフォームは箱形であったと想定する。

建物の床からは鉄鋪、鎧の鉄小札、青銅製帯金具、砥石、肩甲骨などヒツジ骨、炭化したムギ、

キビ、ナツメ種子が、ベッド状施設上からは元祐通宝、鉄インゴットが、廂部分からは鉄車轄、槍先状鉄製品、青銅将棋駒が見つかった。これらは遺棄というより廃棄されたような無秩序で散漫な出土状況であった。床面は屋根崩落土に直接覆われていた。柱穴中にわずかな柱根を残存する例もあったが、柱はすべて抜き取られていた。機能が終わった段階で、床に不用品を廃棄した後、建物は意図的に破壊されたようだ。

区画内からはトレンチ調査で10基の土坑が検出できた。そのうち1号、2号、7号土坑の3基は、浅い皿状の土坑で、版築土で意図的に埋められていた。性格不明である。3号、6号土坑は、数次にわたり生活残滓や不用品を廃棄した、所謂「ゴミ穴」であった。3号土坑からは炭化雑穀粒などとともに、文字を書いた白樺樹皮が出土した。何文字かは不明だが、チベット文字に類似する。5号土坑は配石のある燃焼施設と考えられ、燃料とした褐炭が出土している。1～3号焼飯遺構は「焼飯」という祖霊祭祀と関連する遺構で、祭祀で出た灰や家畜焼骨を廃棄した土坑であった。

第10区画の年代を想定する。放射性炭素年代測定では、3号土坑の炭化雑穀粒の1181-1265calAD (2σ; IAAA-131734)、1号建物跡の梁材の1041-1212calAD (2σ; IAAA-131735)、1号建物床直ナツメ種子の1185-1267calAD (2σ; IAAA-140985)というデータが得られた。つぎに尺度編年でみてみる。当該期には29.6cmを1尺とする尺度と、31.6cmを1尺とする尺度とが存在した。29.6cm尺はチンギス・カン時代、31.6cm尺はオゴデイ・カアン以降のモンゴル帝国時代に用いられたことがわかっている。区画囲壁の長辺は31.6cm尺で120尺であったが、短辺は29.6cm尺で60尺であった。この使用尺度の違いをどのように考えるか。3号トレンチのE11グリッドには囲壁よりも古い壁跡があった。それが解釈にヒントを与える。この古壁から囲壁奥壁までの距離は35.5mで、29.6cm尺で120尺にあたった。つまり、はじめに29.6cm尺で120尺×60尺になるように囲壁が設けられ、その後、長軸方向のみ31.6cm尺で120尺になるように拡張が行われたと理解する。1号建物は31.6cm尺で奥行30尺×間口25尺であった。おそらく区画の囲壁はチンギス治世に築かれたが、オゴデイ以降に囲壁の拡張と1号建物の造営が行われたと考える。一方、この建物が廃棄されたのは、床直出土のナツメ種子のC14年代から、遅くとも1260年代だと想定している。

この建物の機能については現在の資料から明確に述べることは難しい。ただ、アウラガ遺跡の他の住居跡で見つかった床暖房施設が見つかっていないので、住居と考えることはできない。おそらく集会や宗教的な儀式で使われた施設ではなかったかと想定している。

## 2) タワンハイラースト遺跡の調査

本プロジェクトではタワンハイラースト地区第4、第5地点で行った。目的は墓の構造、副葬品の特徴などのモンゴル帝国時代の墓葬の基礎データを収集すること、被葬者の形質人類学的考察、食性分析、自然遺物からの古環境復元を行うことなどであった。

まず、地理的環境について述べる。タワンハイラースト地区はモンゴル国ヘンティ県デリゲルハーン郡にある。ヘルレン (Kherlen) 川屈曲部の東北岸にあるバヤン・ウラーン (Bayan-Ulaan) 山地の東斜面に位置する。この山地は、南北70km、東西50kmの山塊で、最高峰はデリゲルハーン (Delgerkhaan) 山 (2042m) である。山地の東にはスージン (Suujin) 平原が広がる。山地と平野の境界は西南から東北に延びる急峻な崖線となっている。比高200～300mの崖線は東北方向に約200kmにわたり直線的に続く。大規模な断層崖だと想定されている。

その崖線部に西北から東南に下る数本の谷が刻まれている。夏季の一時的かつ急激な降雨による出水で侵食されたもので、タワンハイラーストもその一つである。そこには全長1km弱の谷が2本ある。谷の出口には小規模の扇状地を形成している。2本の谷を北谷と南谷と仮称すれば、北谷には第3地点が、南谷には第4、第5地点が存在する。

地名はこの地域に自生するニレの木に関係する。モンゴル語でニレはハイラース *khailaas* といい、「～のある」という接尾辞 [t] が付いている。タワン *tawan* は「5つの」という意味。つまり「5本のニレの木がある」ということだ。南谷付近はバルダヒン・エンゲル (Bardakhyn enger) 「尊大な斜面」とも呼ばれている。

つぎに、歴史的環境について述べる。崖線の裾部分は東南向きの日当たりの良い斜面は、寒冷期の北寄りの風を遮る風障になることから、現在の遊牧民はこの地区を冬営地として利用している。長期にわたる人類の生活の痕跡が認められ、中部旧石器時代の石器が採集できる。青銅器時代の配石や板石墓も数多く認められるが、多くは崖線の低い部分に存在する。また、突厥時代 (6～8世紀) の遺構は平坦地に多く、崖線地域には少ない。

モンゴル帝国期の墓は崖線地域に数多くみとめられる。墓は、平面が径 3~5m ほどの円形で、人頭大の石を 1m ほど積み上げたものである。多くの場合、単基で散在しているのではなく、数基から十数基がまとまって墓群を形成している。墓群が集中する場所は、海拔と地形でつぎのように 3 つに分けられる。まずは、海拔 1320~1380m ほどの崖線裾部の緩斜面。これをレベル 1 の墓と呼ぼう。つぎに、海拔 1380~1420m の斜面にできた狭い平坦面や凹地。これをレベル 2 の墓と呼ぼう。最後に、海拔 1460~1500m の斜面にできた狭い平坦面や凹地。比較的墓群あたりの基数が少なく、墓の規模も大型の傾向がみとめられる。これをレベル 3 の墓と呼ぶ。今回調査した 3 つの地点はこのグループに属す。

タウンハイラースト第 4、5 地点は南谷にある。そこはバルダヒン・エンゲルとも呼ばれる。谷といっても目立った沢のない U 字状を呈する。傾斜は 40%。斜面の中腹の若干の東南向き緩斜面に二つの墓群がある。海拔は 1477~87m。両者は東西に 30m 離れている。西側が第 4 地点で 6 基の石積墓から成る。東側が第 5 地点で 8 基の石積墓で構成されている。

2013 年度はタウンハイラースト第 4 地点で 2 基、同第 5 地点では 2 基のモンゴル帝国時代の墓を発掘した。タウンハイラースト第 4、5 地点のモンゴル帝国墓群は、レベル 3 とこの地域でもっとも高地に存在する墓群であった。そのことがどのような差異として表れているのだろうか。今回調査した第 4 地点 1 号、2 号、第 5 地点 8 号墓は、いずれも構造上で大きな差は無く、また、2012 年までに掘った墓とも外見上は顕著な違いが認められなかった。しかしながら、副葬品は盗掘や攪乱を受けながらも、かなり豊かで質の高い物が納められていたことがわかった。レベル 2 と 3 という高度差が被葬者の地位を反映させている可能性がある。高所に葬られた方がハイランクといえるようだ。AMS 分析の結果、タウンハイラースト第 4 地点 1 号墓は 11 世紀半ば~12 世紀半ばという、いわば先モンゴル期であることがわかった。今後、モンゴル帝国の成立を考える際に重要な資料になろう。また、墓の構造や遺物に差異が無く、細かい前後関係を知ることが難しいこの時代の墓葬において、理化学的年代測定が有力な武器になることがわかった。これもひとつの大きな成果だと考える。第 4 地点 2 号墓、第 5 地点 1、8 号墓は校正曲線の関係で測定値が複数得られたが、墓の構造や内容から、第 4 地点 2 号墓は 13 世紀末~14 世紀初頭、第 5 地点 1 号墓と 8 号墓は 14 世紀前葉~中葉と考えるのが妥当であろう。

2014 年度は引き続き第 4 地点と第 5 地点で発掘調査。第 4 地点では 13 世紀末~14 世紀初頭の墓を 4 基発掘。いずれも地表の円形積石が径 5~6m と大規模。埋葬施設は地下 1.5m ほどの素掘り土坑で、葬具は木棺。1 基のみ石槨を伴っていた。被葬者はすべて男性で、副葬品には銀椀や鉄製武器があった。第 5 地点では前者と同時期の 2 基を発掘。一基は男性墓で木棺が良く残り、金糸のある絹製品、鉄製馬具(鐙・轡)、木製鞭、木製鞘付き鉄剣、鎧の青銅製護心鏡など多数の副葬品を伴った。もう一基はボクタグ帽とガラス玉が出土。両地点とも被葬者はハイランクで、チンギス遺宮(ヘルレン大オールド)と関連のある人物の墓と考えられる。

2015 年度は第 5 地点で 4 基発掘した。いずれの墓も地表に径 2~3m の円形積石がみられ、埋葬施設は地下 1.5m ほどの素掘り土坑であった。盗掘を受けていて副葬品はほとんどなかったが、鉄鏃の入った白樺樹皮製の矢筒が出土した。放射性炭素年代で 1 基が 14 世紀、のこり 3 基は 15 世紀中頃とわかった。この地域の墓地は 15 世紀中頃をもって廃絶する。この墓地にはチンギス・カン大オールド(アウラガ遺跡)の関係者が葬られたと考えられる。大オールドの廃絶が 15 世紀中頃で、その動向と一致する。

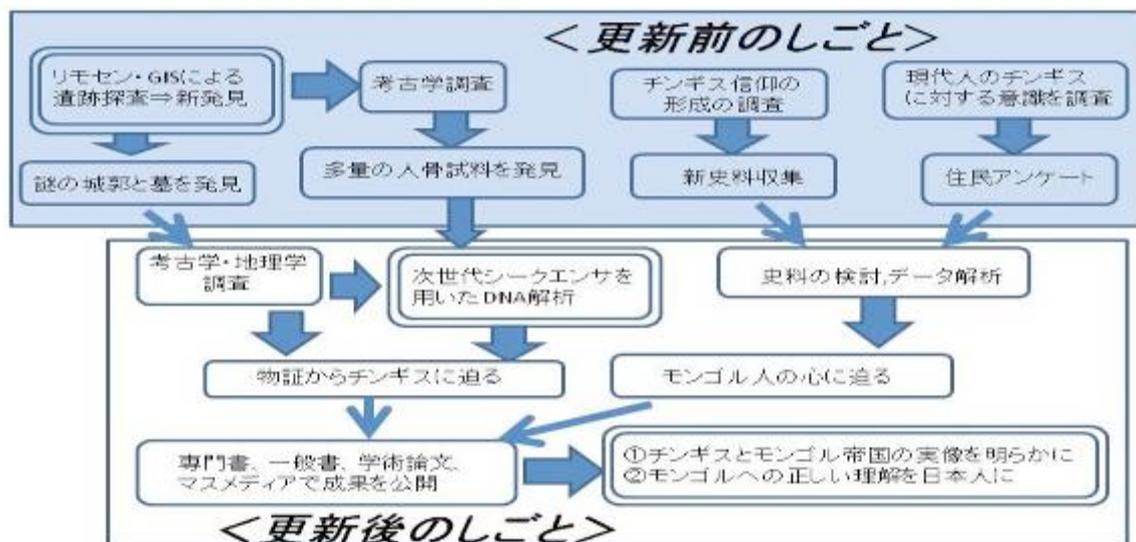
#### ④更新する期間(2年間)で目標とする事項及びその研究計画

アウラガ遺跡とタウンハイラースト遺跡での成果は、自然地理学と考古学のコラボレーションが成功した好例といえる。また、本学の機器分析センターを活用して遺物の理化学的分析も実施したことも、学内資源の有効利用として評価できよう。このように人社系ベースの文理融合型研究の可能性を示すことができたといえる。ただ、狭い分野での協業なので、さらに他分野へと展開することが必要か。更新期間には衛星写真や地理情報システムを活用した遺跡の発見や遺跡分布の特徴の把握などを実施したい。

タウンハイラースト遺跡における人骨試料の獲得は、これまで不明な点が多かったモンゴル帝国の支配者層の実像に迫れる世界的成果といえる。しかし、本学には形質や遺伝子分野で連携できる研究者がおらず、研究の展開が休止してしまっている。更新期間では本学歯学部との協力のもと、信州大学医学部法医学教室と共同で、次世代シーケンサを活用した DNA 分析を行う予定である。

内モンゴルにおける文献史学からのアプローチで明らかになったチンギス崇拝への日本の関与は、これまでも指摘されてきたことだが、今回の検討でより具体的に解明できたと考える。しかしながら、分析の時間が短く、新事実解明には、さらに史料の蓄積が必要であることは間違いない。更新期間ではチンギス崇拝普及への日本軍の関与を具体的に示す史料のさらなる集積を試みる。

留学生に対するアンケートの結果は、調査母集団が小さく、精度の高い分析には、さらに広範囲の調査が必要である。調査母集団を増やし、改めてアンケートを実施することで、その背景を明らかにする。



中間報告時までの研究成果と、最終報告へ向けての取り組み

## ⑤研究発表実績

### ア 学会誌等

柴田幹夫「辛亥革命期における日本人の行動—本願寺教団・大谷光瑞の動向を中心に—」『研究論集』第12集 河合文化教育研究所、平成27年5月。

広川佐保「『日華之実業』解説・目録」『環東アジア研究』第9号、平成27年3月。

Takeuchi, N., Fujita, K., Aizen, V., Narama, C., Yokoyama, Y., Okamoto, S., Naoki, K., Kubota, J., The disappearance of glaciers in the Tien Shan Mountains in Central Asia at the end of Pleistocene, *Quaternary Science Reviews*, Vol.103, 2014.

柴田幹夫「大谷光瑞與台湾—以逍遙園为中心—」『法印学報』第4期、仏教弘誓学院(台湾)、平成26年。

柴田幹夫「『日華学堂日誌』1898～1900年」『新潟大学国際センター紀要』9号、平成25年3月。

広川佐保「大興安嶺をこえて：中東鉄道を巡る調査記録(2012年夏)」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』第25号、平成25年12月。

白石典之 Нүүдэлчдийн төр улс үүсэн бий болоход төмөр нөлөөлсөн нь: Их Монгол улсын үеийн нийгэм улс төр төмөрлөгийн асуудалд. *Acta Historica* 13, モンゴル国立教育大学、平成24年。

広川佐保「『蒙古義軍秘挙事筌蹄』および解題」『近現代東北アジア地域史研究会 News Letter』第24号、平成24年12月。

### イ 口頭発表

村上智見・白石典之「モンゴル帝国期の金糸織物」日本モンゴル学会2015年度春季大会、新潟大学、平成27年5月16日。

Shiraishi, N. On the Lower Enclosing wall of Erdene Zuu Monastery. *Дэлхийн өв - Орхоны хөндийн соёлын дурсгалт газрын 10 жил: Өнгөрсөн ба өнөө үе*. Хархорум музей、平成26年9月7日。

白石典之・B.Tsogtobaatar・G.Lkhundev・G.Batbold・Ts.Amgalantugs・L.Delgermaa 「モンゴル国タワ

ンハイラスト遺跡における青銅器時代墓の調査」、第15回北アジア調査研究報告会、札幌学院大学、平成26年3月2日。

白石典之「鉄から描く遊牧民の歴史」、国際シンポジウム「鉄と匈奴ー遊牧国家像のパラダイムシフト」、愛媛大学、平成25年11月9日。

佐々木尚子・相馬秀廣・白石典之、B.Tsogtbaatar「モンゴル中北部オーギン川上流部およびボスゴテンゲリン峠における歴史時代の花粉組成(ポスター)」日本花粉学会第54回大会、松山大学、平成25年8月31日。

## ウ 出版物

白石典之編、広川佐保・奈良間千之・柴田幹夫ほか共著『チンギス・カンとその時代』勉誠出版、平成27年9月。

広川佐保「建国大学とモンゴル人ーモンゴル人青年の模索と挫折」(ボルジギン・ブレンサイン・赤坂恒明編)『内モンゴルを知るための60章』明石書店、平成27年7月。

奈良間千之・渡邊三津子「自然環境と人々のかかわりー地形、気候と氷河の役割」(宇山智彦・藤本透子編)『カザフスタンを知るための60章』明石書店、平成27年4月。

白石典之・B.Tsogtbaatar『タワンハイラスト II、日本・モンゴル共同考古学調査「新世紀プロジェクト」2013年春季調査報告書』日本モンゴル共同新世紀プロジェクト、平成27年3月。

Shiraishi, N., B.Tsogtbaatar(2014) *Preliminary Report on Japan-Mongolia Joint Archaeological Expedition "New Century Project" 2013, 2014*. 16p, Japan-Mongolia Joint Archaeological Expedition "New Century Project." 平成27年3月。

柴田幹夫『大谷光瑞の研究ーアジア広域における諸活動ー』勉誠出版、平成26年5月。

広川佐保「近代ハルハ・モンゴルにおける土地制度の系譜とその展開」『環東アジア地域の歴史と情報』知泉書院、平成26年3月。

白石典之「利用“尺度考古学”再探額済納史」『黒水城兩千年歴史研究』中国人民出版社、平成25年12月。

広川佐保「オラーンフー／セレンドンロブ／テムチュグドンロブ／ハーフンガ／ボヤンマンダホ／マルチンフー／リンチン」『岩波世界人名大辞典』岩波書店、平成25年12月。

白石典之・B.Tsogtbaatar『イフハイラント・タワンハイラスト、日本・モンゴル共同考古学調査「新世紀プロジェクト」2012年調査報告書』日本モンゴル共同新世紀プロジェクト、平成25年3月。

広川佐保『満洲国期におけるモンゴル語刊行物ー《復刊》“モンゴル・セトグール”、“ソンスゴル”、“ヒンガン”』(新潟大学人文社会・教育科学系附置環東アジア研究センター編, 環東アジア研究叢書3)、平成25年3月。

白石典之「ゴビ砂漠における契丹系文化の遺跡」『アジア遊学』160、勉成出版、平成25年1月。

広川佐保“1920-1924 Оны Дундад Иргэн Улсын Гадаад Монголыг Хураан Авах Бодлого.” *Олон Улсын Монголч Эрдэмтний Х Их Хурлын Илтгэлүүд: IV Салбар: Монголын Гадаад Харилцаа, Дипломат Ёс*. Улаанбаатар, 平成25年。

## ⑥競争的資金の応募・採択状況

### 白石典之

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤A・海外)(平成27-31年)「モンゴル帝国成立基盤の解明を目指した考古学的研究」(代表:白石)2,460万円、採択。
- 2) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤A)(平成22-26年)「モンゴル帝国の成立史解明を目指した環境考古学的研究」(代表:白石)2,260万円、採択。

### 広川佐保

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤C)(平成25-27年)「1910~20年代、モンゴルの近代国家形成と財務官僚ー土地法確立過程を中心に」(代表:広川)429万円、採択。

### 奈良間千之

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤C)(平成25-28年)「中央アジア及びヒマラヤの小規模氷河湖分布地域における氷河災害の軽減に関する研究」(代表:奈良間)497万円、採択。
- 2) 三井物産研究助成(平成25-27年)「中央アジア及びヒマラヤの氷河災害の軽減に関する研究」

(代表：奈良間) 1,099 万円、採択。

- 3) 平和中島財団研究助成(平成 25 年)「アラアルチャ国立公園における複合ハザードマップの作成に関する研究」(代表：奈良間) 149 万円、採択。

#### 柴田幹夫

- 1) 日本学術振興会科学研究費補助金(基盤 C)(平成 23-25 年度)「大谷光瑞とアジアーその開教土壌の歴史的考察」(代表：柴田) 400 万円、採択。

#### ⑦研究成果による知的財産権の出願・取得状況

「該当なし」

#### ⑧新聞等のメディアに掲載された事項

##### 新聞

- 1) 「蒼き狼の都 2012」『読売新聞』平成 24 年 12 月 12 日朝刊文化面(全国):本プロジェクトが調査フィールドとするモンゴル国アウラガ遺跡の平成 24 年度調査の成果。
- 2) 「蒼き狼の都 2013」『読売新聞』平成 25 年 12 月 4 日朝刊文化面(全国):本プロジェクトが調査フィールドとするモンゴル国アウラガ遺跡の平成 25 年度調査の成果。
- 3) 「蒼き狼の都 2014」『読売新聞』平成 26 年 10 月 1 日朝刊文化面(全国):本プロジェクトが調査フィールドとするモンゴル国アウラガ遺跡の平成 26 年度調査の成果。
- 4) 「書評『チンギス・カンとその時代』(楊海英・評)」『産経新聞』平成 27 年 11 月 8 日朝刊文化面(全国):本プロジェクトのメンバーが中心となり、これまでのプロジェクト研究成果の一部をまとめた書の書評。
- 5) 「蒼き狼の都 2015」『読売新聞』平成 27 年 12 月 9 日朝刊文化面(全国):本プロジェクトが調査フィールドとするモンゴル国アウラガ遺跡の平成 27 年度調査の成果。

##### テレビ

- 1) 「チンギス・ハン」NHKBS プレミアム『ザ・プロファイラー』平成 26 年 10 月 1 日:チンギス・ハンの実像に関して、白石が出演し、考古学からの最新成果を織り混ぜて伝えた。
- 2) 「史上最大の謎・チンギス・ハン」NHKBS プレミアム『ザ・プレミアム』平成 26 年 11 月 29 日:本プロジェクトが調査フィールドとするモンゴル国アウラガ遺跡の平成 26 年度調査記録。